

はじめに

江戸時代、現在の江戸川区一帯には田畑が広がり、海では漁が盛んに行われていました。そこで暮らす庶民にとって、「祭礼」は、五穀豊穡ごこくほうじょうを祈念する大切な行事でした。祭礼で演じられた、祭り囃子ばやしの「調子」や庶民たちの「舞い」には、収穫や繁栄の願いが込められ、「唄」のひとつひとつには、暮らしの中での喜びなどが表現されています。

「葛西囃子かさいばやし」「おしゃらく」「里神楽」は、いずれも江戸川区の風土で培われた伝統的な民俗芸能です。庶民の暮らしの中で「技」や「型」は、長い年月を経て郷土の「文化」として発展しました。

庶民の想いを映すえどがわの伝統芸能。本展示では、江戸川区の歴史を彩り、今に伝承される「葛西囃子」「おしゃらく」「里神楽」の魅力をご紹介します。

豊作の願いを込め、 郷土に響く命の鼓動。

葛西囃子は、江戸時代から農作物の豊作を祈願するために神社の祭礼で演奏されてきた民俗芸能です。現在も江戸川区内の各神社の祭礼で奉納されており、恒例の行事となっています。

太平洋戦争前までは単に「おはやし」と呼ばれていましたが、
笛^{しほびいこ}1人、締太鼓^{あきだいに}2人、大太鼓^{おほ}1人、鉦^{かね}1人の5人で演奏することから「五人囃子」とも呼ばれました。「葛西囃子」として親しまれるようになったのは、戦後に江戸川区で保存団体が結成されてからのことです。

江戸時代以来の伝統文化として1953(昭和28)年、「東京都指定無形民俗文化財」に、1981(昭和56)年には「江戸川区登録無形民俗文化財」になっています。



1950(昭和25)年、東都葛西囃子協会結成



1957(昭和32)年、「葛西囃子之碑」を八蔵橋・香取神社境内に建立

えどがわの地で 300年前から育まれてきた祭囃子。まつりばやし

葛西囃子の起源は、江戸時代の享保年間(1716~1735年)にさかのぼります。当時、香取明神(現・葛飾区金町の葛西神社)の神官だった能勢環のせたまが和歌にリズムをつけ、5人編成で演奏する「和歌囃子」を創作しました。それを近隣の若者に教えたのが葛西囃子の始まりと言われています。

宝暦3(1753)年には、関東代官*の伊奈半左衛門が、天下泰平、五穀豊穰*を祈願して演奏を奨励しました。さらに、毎年、神田明神の祭礼で演奏し、喝采を浴びるようになると江戸中で大流行しました。こうして葛西囃子は祭礼に欠かせない音楽として普及し、現代まで受け継がれています。

*関東代官:現在の警視總監と知事の権限を併せ持つ江戸時代の公職。

*五穀豊穰:ここでは農作物の豊かな収穫の意。



東都葛西囃子協会 葛西囃子



東都葛西囃子協会 奇獅子

見どころ①
オカメのお参り
 オカメが元日にお屠蘇を飲み、着替ってお宮参りに行くこうとするところ、モトキ（遣化役）が登場します。



見どころ②
邪魔するモトキ
 モトキはふざけてオカメがお宮に向かおうとするのを邪魔します。



見どころ③
お獅子
 モトキが今度は桶を横にしてそれを獅子の頭に見立てる感して舞い始めます。



見どころ④
三味線
 足を止めたオカメは帯を三味線に見立てて扇をパチにしてひきはじめます。



見どころ⑤
芸者と人力車
 最後にモトキが桶と傘の人力車で芸者役のオカメを引いて引っ込みます。



見どころ⑥
採り人形
 こんどはオカメが箒を使ってモトキを採り人形のように動かします。



見どころ⑦
お雑子
 里神楽の雑子は太鼓、大拍子、笛、鉦などの楽器を使用します。



「初詣

葛西の里神楽

えどがわの
伝統芸能

見てから観るか、
観てから見るか！？
えどがわの伝統芸能、
鑑賞のススメ。

展示会場にて
「江戸川区の伝統芸能展」



」のみどころ

五穀豊穡を願う、 神楽殿での荘厳な舞い。

「神楽」とは、神に祈りを捧げるために、お囃子に合わせて舞う、ストーリー性のある舞踏です。葛西の里神楽は、地域の五穀豊穡を祈り、神社で舞われてきました。祭事、神事とのつながりが密接なことから、「古事記」「日本書紀」など、神話の題材が演じられています。

江戸川区で里神楽が演じられるようになったのは明治の初め頃です。西小松川村の天祖神社の神官であり、笛の名手でもあった秋元順之助により広められたと伝えられています。本来は神職に携わる者が務めていた神楽ですが、その門下からは一般の能楽師が育ち、区内の各神社で本格的な里神楽が演じられるようになりました。



葛西の里神楽の神楽殿で舞うお囃子の演奏
写真提供/砂子 敦子

守り伝える、祖父の残した“かたち”と“こころ”。



葛西の里神楽の伝承者
前編 佐藤 誠人

祖父から私がお神楽を習うようになったのは、6歳の時。面にかつら毛に衣装と、真夏には身に着けるだけでも大変な芸能なのですが、何故か魅了されてしまい、今日に至ります。

現在の目標は、祖父の時代に上演した演目をすべて再現することです。祖父がそろえた面や小道具は今でも現役で使用できますから、そのすべてを使いこなし、本来の意味で祖父が残したものをすべてを次代に伝える道筋を作りたい、それが、葛西の里神楽の継承者である私の使命であり、意地です。



あば綱よつたり

「あば綱よつたり」は「あば綱よつたり」の踊りです。あば綱は、おば（子守）を指すおどろけ言葉です。子守歌の中から、このあば綱の踊りも選ばれることがあります。

手紐の加減



手紐は舞の両手と腰部分の飾りです。手紐の加減は顔から身にかけて（顔、肩、肘、腰、膝、足）も同じように「加減」がされます。

あの娘と添うなら



舞の動きに合わせて、「あの娘と添うなら、三笠三笠、舞の娘と添うなら、舞の娘と添うなら」と唄われます。

水底までもナ



「あの娘と添うなら、水底まで、水底までもナ、水底までもナ」と唄われます。水底まで水底まで舞うのが特徴です。

おじぎ



舞の動きに合わせて「おじぎ」の唄が聞こえ、おじぎに入ります。おじぎの唄は、おじぎの唄の唄い方と合わせて唄われます。

新川地曳きの娘



唄い出しの「新川地曳きの娘、新川地曳きの娘、新川地曳きの娘」と唄われます。おじぎの唄の唄い方と合わせて唄われます。

「大川上り下りの」



舞の動きに合わせて、「大川上り下りの、大川上り下りの、大川上り下りの」と唄われます。おじぎの唄の唄い方と合わせて唄われます。

おじぎ



舞の動きに合わせて、おじぎの唄が聞こえ、おじぎに入ります。おじぎの唄は、おじぎの唄の唄い方と合わせて唄われます。

お稲荷さん



ここで舞の動きに合わせて、「お稲荷さん、お稲荷さん、お稲荷さん」と唄われます。お稲荷さんの唄の唄い方と合わせて唄われます。

「拝みなさいよと」



舞の動きに合わせて、「拝みなさいよと、拝みなさいよと」と唄われます。お稲荷さんの唄の唄い方と合わせて唄われます。

船頭の子なれば



舞の動きに合わせて、「船頭の子なれば、船頭の子なれば」と唄われます。お稲荷さんの唄の唄い方と合わせて唄われます。

面舵取り舵



「面舵取り舵、面舵取り舵、面舵取り舵」と唄われます。お稲荷さんの唄の唄い方と合わせて唄われます。

「新川地曳さ」のみどころ

おしやらく

江戸川区の
伝統芸能

見てから観るか、
観てから見るか!?
鑑賞のススメ。

展示会場にて
「江戸川区の伝統芸能展」開催中!



葛西の人々の“粋”を今に残す 「おしやれ」な舞踊。

おしやらくは、「お洒落」「おめかし」という意味の江戸言葉です。「もい」と×さん、そんなにおしやらくして、どこ行くね?というような会話で庶民の間では活き活きと文わさされていました。その言葉のとおり、おしやらくの衣装は艶やかな赤、黄色、桃色など鮮やかな色彩でまとの上げられています。笠や杖、人形など、演目により異なる小道具、そのいの振り付けで三味線の調子に合わせて踊る仕草からは、往時のセンスをはかり知ることができます。

江戸の風俗を今に伝えるおしやらくは、1973(昭和48)年、「東京都指定無形民俗文化財」に、1981(昭和56)年には「江戸川区登録無形民俗文化財」になっています。



「葛西のおしやらく保存会」の舞踊



葛西おしやらく保存会
会長 藤本 幸徳さん

かけがえのない江戸川区の文化

私が邦楽の演奏家を志して三味線の修行をしていた頃、葛西の舞殿を訪ねたところ、すてにおしやらくの芸は風情の灯でした。「これはえらいことだ」と、おしやらくを知る方々を訪ね歩き、1年ほどかけて『葛西おしやらく保存会』を発足しました。昭和45年のことです。当時の方々はもうどなたも残っていませんが、受け継いできたおしやらくの「味」をそのままに、次の世代につないでいきたい。おしやらくはそれだけの価値がある、かけがえのない江戸川区の文化です。

寿獅子のみどころ

葛西囃子

江戸川区の
伝統藝能

見てから観るか、
観てから見るか!?
鑑賞のススメ。

展示会場にて
「江戸川区の伝統芸術展」開催中!



えどがわの地で 300年前から育まれてきた祭囃子。

葛西囃子の起源は、江戸時代の享保年間(1716~1735年)にさかのぼります。当時、善取明神(現・葛西区全町の葛西神社)の神官だった能勢儀が和歌にリズムをつけ、5人編成で演奏する「和歌囃子」を制作しました。それを近隣の若者に教えたのが葛西囃子の始まりと言われています。

宝暦3(1753)年には、関東代官*の伊奈千左衛門が、天下参平、五段豊穡*を折願して演奏を奨励しました。さらに、毎年、神田明神の祭礼で演奏し、場を浴びるようになると江戸中で大流行しました。こうして葛西囃子は祭礼に欠かせない音楽として普及し、現代まで受け継がれています。

関東代官 徳川の幕府制度における幕府と各藩をつなぐ役職の総称。
五段豊穡 江戸時代には江戸川沿いの水田で稲作が行われていた。



葛西囃子(左) 江戸囃子(右)



葛西囃子(左) 江戸囃子(右)



年度葛西囃子協会
会長 飯塚明夫さん

同じ曲、同じ楽器でも“匠”は演奏者によって違ふんです。

演奏者はそれぞれ師匠から学んだ技に自らの経験を加え、自分だけの音を持っています。同じ曲でも年齢を重ねるごとに音の味わいが大きく変化します。月に一度の研究会では、お互いの技を披露したり、アドバイスを合ったりしています。今後も研鑽(けんさん)を重ね、次の世代に葛西囃子を伝えていくことが無形文化財に携わる者の使命だと考えています。

守り伝える、祖父の残した “かたち”と“こころ”。



東都葛西神楽保存会
会長 岩橋美よ志さん



葛西神楽保存会初代会長で、岩橋
美よ志さんの祖父である岩橋巳好さん
写真提供／葛西神楽保存会

「江戸っ子のお祭りに、お囃子とお神楽は欠かせない。葛西から里神楽を無くしちゃいけない」。そう言って祖父の岩橋巳好（葛西神楽保存会初代会長）は、戦後の貧しい時代に高価なお神楽の道具をひとつひとつ買いそろえ、葛西に里神楽の文化を根付かせていきました。そんな祖父から私がお神楽を習うようになったのは、6歳の時。面にかつら毛に衣装と、真夏には身に着けるだけでも大変な芸能なのですが、何故か魅了されてしまい、今日に至ります。

現在の目標は、祖父の時代に上演した演目をすべて再現することです。祖父がそろえた面や小道具は今でも現役で使用できますから、そのすべてを使いこなし、本当の意味で祖父が残したものをすべてを次代に伝える道筋を作りたい。それが、葛西の里神楽の継承者である私の使命であり、意地です。

歌舞伎や能などの 魅力を散りばめた民俗芸能。

平安時代、神楽は宮廷の神事として演じられていました。やがて民間にも広がり、宮中の神楽を「御神楽」、それ以外を「里神楽」と分けて呼ぶようになりました。江戸時代初期、江戸にその舞いが伝わると、「江戸里神楽」として発展していきました。これが葛西の里神楽の源流です。

江戸里神楽の流れを汲む葛西の里神楽では、能の「すり足」、歌舞伎の「見得」など、他の芸能の影響が随所に見られます。登場人物も、女神や天狗やおかめ、ひょつとこなどバラエティに富んでいます。

このことから、当時の江戸っ子の嗜好が垣間見えると同時に、里神楽の柔軟でおおらかな一面がうかがえます。



能の演目を里神楽に取り入れた「紅葉狩」
写真提供／葛西神楽保存会



おかめとひょつとこ

ごこくほうじょう

五穀豊穰を願う、 神楽殿での荘厳な舞い。

「神楽」とは、神に祈りを捧げるために、お囃子に合わせて舞う、ストーリー性のある舞踏です。葛西の里神楽は、地域の五穀豊穰を祈り、神社で舞われてきました。祭事、神事とのつながりが密接なことから、「古事記」「日本書紀」など、神話の題材が演じられています。

江戸川区で里神楽が演じられるようになったのは明治の初め頃です。西小松川村の天祖神社の神官であり、笛の名手でもあった秋元順之助により広められたと伝えられています。本来は神職に携わる者が務めていた神楽ですが、その門下からは一般の能楽師が育ち、区内の各神社で本格的な里神楽が演じられるようになりました。



篠崎浅間神社の神楽殿で演じられる里神楽
写真提供/砂子 智さん



飴屋の衣装

飴屋は全国津々浦々を旅する遊芸人です。客寄せのために派手な衣装をまとい、盤台(たらい状の入れ物)を頭にのせ、団扇太鼓や鉦を鳴らして水飴などを子どもたちに売っていました。

曲に込められたドラマ性、
演じる奥深さがそこにはあります。



葛西おしゃらく保存会 田中浩子さん

母が大のおしゃらく好きでした。半ば強引に誘われ、観に行
ってから、今に至ります。おしゃらくって一曲一曲にドラマがあっ
て、奥が深いんです。でも、そうした想いが所作に出すぎてしま
うと別物になってしまう。私は日本舞踊もやっていますが、普通
の踊り以上におしゃらくの表現はむずかしい。

最近はお母さんと娘さんでお稽古にはげんでいる方もいま
す。年配の人たちがきれいな衣装を着て、ちよつと若返って楽し
く踊っている姿もぜひ見学にいらして頂きたいですね。

体に刻みこまれた おしゃらくの生の響き。



葛西おしゃらく保存会
会長 吉田勝人 (藤本秀康)さん

幼い頃、祖母と葛西大師講[※]に出かけた記憶があります。お昼時になるとどこからともなく「コラサ〜」と、おしゃらくが始まります。そんな風景を見て育ったので、生の響きを体で覚えているんです。後年、「そういえば故郷のおしゃらくはどうなってるのだろう?」と葛西の親戚を訪ねたところ、すでにおしゃらくの芸は風前の灯でした。「これはえらいことだ」と、おしゃらくを知る方を訪ね歩き、それから1年ほどかけて「葛西おしゃらく保存会」を発足、受け継いできたおしゃらくの「味」をそのままに、次の世代につないでいく活動を続けています。おしゃらくはそれだけの価値がある、かけがえのない江戸川区の文化です。

※葛西大師講：四国八十八箇所霊場巡りになぞらえ、葛西の各地域に札所を設け、巡行する風習。「葛西大師まいり」という名称で、江戸川区の登録無形民俗文化財となっています。

ルーツは「踊り念仏」。

時をかけ、磨き上げられた 民俗芸能。

鉦や太鼓を鳴らし念仏を唱えながら舞う江戸時代の「踊り念仏[＊]」がおしゃらくの起源とされています。しかし実際のおしゃらくでは、念仏そのものが入った曲はごく少数で、多くの演目には地域の自然や祭り、神事、生活の営みなどが生き生きと描かれています。

当時、太鼓や鉦をたたいて客寄せをする「^{ありや}鮎屋」や、三味線を弾き語る盲目の旅芸人「ごぜの坊」など、多くの商人や旅芸人が現在の江戸川区葛西周辺や千葉県浦安市の村々へやって来ました。おしゃらくはこうした人たちとの交流の中、それらの振りや謡^{うた}いなど、民俗芸能のいろいろな所作を採り入れ、時をかけて磨きあげられていきました。

※踊り念仏：平安時代中期の僧「空也」が始めたとされる、踊りながら太鼓や鉦を打ち鳴らして、念仏を唱える行。広く関東や東北地方の各地にも広がり、その名前も、「小念仏」と呼ばれたり、下総中山では「中山踊り」と呼ばれていたように、演じられる地域によって違いがあります。

「よかよか鮎屋」の舞台



同じ曲、同じ楽器でも“音”は演奏者によって違うんです。



東都葛西囃子睦会
会長 根岸明夫さん

東都葛西囃子睦会は葛西囃子を極め、伝承することを目的としたグループです。メンバーのほぼ全員が複数の楽器を担当できます。祭礼で1日に何度も演奏する時は、囃子ごとにメンバーで担当する楽器を交替しながら演奏します。そうすると、同じ囃子でも音が微妙に違うんですよ。これは、演奏者がそれぞれの楽器について、師匠から学んだ技に自らの経験を加えた、自分だけの音を持っているからです。同じ笛でも年齢を重ねるごとに音の味わいが渋く変化します。月に一度の研究会では、お互いの技を披露したり、アドバイスし合ったりしています。今後も研鑽を重ね、次の世代に葛西囃子を伝えていくことが無形民俗文化財に携わる者の使命だと考えています。